

からこかぎ

第9号 平成27年3月11日(水)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 青垣生涯学習センター唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

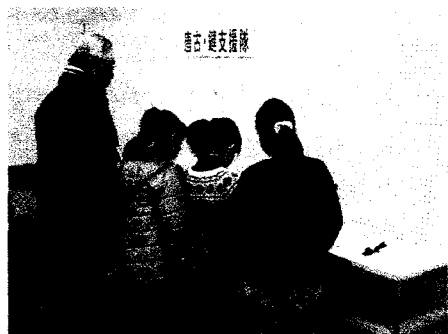
町内小学校の作品展

—総合的な学習の時間の支援活動報告—

今西和代

平成26年度の学校支援の活動のまとめとして、田原本町青垣生涯学習センター2階で町内5校の6年生の作品展(1月30日から2月4日)を催しました。勾玉、野焼き土器、弥生時代について調べたことや制作時に聞いた事柄・感想をまとめた新聞や写真集などが部屋いっぱいに飾り付けられました。5日間の開催期間中274人(大人172名子供102名)の方に見学いただきました。

前日の準備では、先輩の先生と若い先生とが協力し合って子供たちの作品がより映えるように飾られる姿を見て、私たちの活動の意義を改めて確認できました。



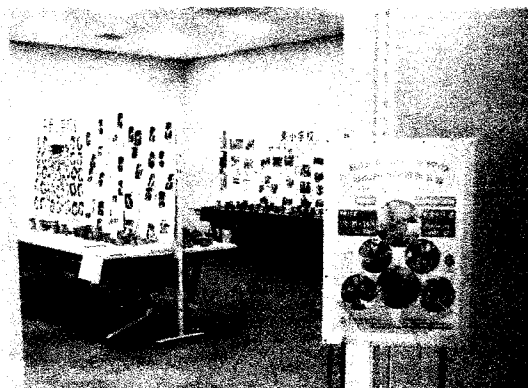
また、開催中に親子が支援隊へのお礼の文集を見て、『私らが書いてんで、先生が届けてくれはってんわ。』と子供が得意気にお母さんに話していました。

母親は『この頃はお礼の手紙を書くのはめったにないけど、こんな取り組みをしてくれたはるから手紙を書いて先生方が届けて下さってるんやなあ。』との会話に感激しました。

最後に、平成26年度の総合的な学習の支援活動の実績をご報告いたします。

総合的な学習とは、子供たちに地域社会を総合的に理解して欲しいという趣旨で、多くの弥生遺跡がある田原本町では、当時の人々の生活を体験することを目的に多様なメニューを小学校のカリキュラムに組み込んでいます。

具体的には、唐古・鍵考古学ミュージアム見学、勾玉作り、火熾しと土器炊飯、弥生土器作り、土器野焼き、脱穀等のメニューを実施しています。



平成26年度も田原本町町内の東小学校(20名)・北小学校(33名)・南小学校(54名)・平野小学校(62名)・田原本小学校(126名)の小学6年生に対し、4月23日より12月12日までの間の計22日間、各小学校に出向き体験学習を支えてきました。

支援して下さる会員も本年度も延べ201名となり、お陰さまで滞りなく支援活動を終えることができました。ありがとうございました。

弥生3月になりました。4月からの学校支援の準備も、ものづくり教室のメンバーが進めてくれています。

本当に、新しい6年生との出会いが楽しみです。

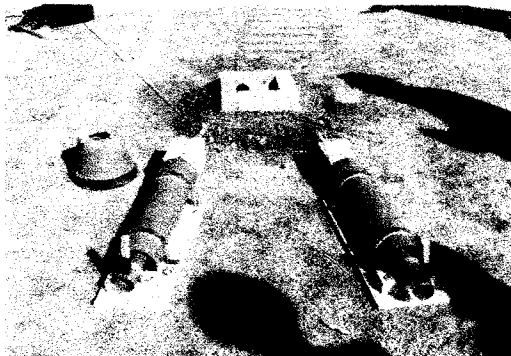
古代ものづくり教室から

—青銅器溶融実験失敗編—

山本淳史

古代ものづくり教室では、2月4日に「青銅溶融体験」企画を実施しました。結果は、青銅は溶けず、細粒(5mm)に砕けただけで見事失敗でした。皆さんのお知恵を拝借いたしたく、今回の計画内容を簡単に説明します。

私たち「古代ものづくり」の目標は、その名前の様に、出来る限り弥生の人たちに近い手法で再現することを第一義にしています。だから現在の銅鐸熔鑄に用いられている電動送風機、コークスの使用は、今回の選択肢から除外しました。木炭でも1100度以上の炉心温度が可能との信念をもって挑戦しましたが、結果は惨敗でした。準備した実験炉は下の写真を見ていただければわかりますが単純な装置です。



具体的には、フイゴ、風管、羽口、炉体、煙突、燃料、るつぼ、で構成されています。

まずフイゴですが、大型の水鉄砲をイメージして作りました。外筒(φ100mm)と、中のピストン部分(φ75mm)は簡単に組立できる塩ビパイプを利用して作りました(根気と技があれば木製でも制作可能と考えています)。ピストンを前後に動かす動力は人力です。吸気と送風用の弁は木製の板を懸垂し取り付けました。ストローク400mm・風量3,000ccです。

風管と塩ビ製のフイゴとの繋ぎに木箱を取り付け、弁室を設けました。羽口までの風管は多少の熱風に耐えられるよう、節を抜いた丸竹で代用しました。炉体と接続する羽口は昨年夏の

土器づくりで制作した土製を使用、また各継ぎ目の漏気防止には粘土とパテを使用しました。

炉本体は、耐火煉瓦で作りました、積み重ねただけでモルタル等では接着はしていません。ただし炉体の周りに土を盛り上げグラつかないように固定しました。最上部には煙突効果を考えて、素焼きの鉢を逆さにして炉体に被せました。炉体の内法は165mm*165mm*高さ230mmです。

燃料は木炭を使用。今回は費用節減のためキャンプ用のマングローブ炭を購入しました。

るつぼは、土器づくりで土器碗として作成したものを転用しました。

溶融用の青銅は、十年ほど前に唐古・鍵遺跡で小泉さんが銅鐸の熔鑄再現をした時のイベントで頂いたものを使用しました

1週間前には、ボランティア室で組立て、フイゴの動作確認と、風管の継手、風管と炉体の調整を済ませました。

当日の天候はフィールド実験に打ってつけの申し分ない快晴で、10時半火入れ、その後昼食を挟んで、3時間フイゴを交替で動かし続け、13時半ルツボが黄色味を増したのを確認して、炉を解体し取り出しました。ですが、結果は最初に報告した通りです。

後日、プロの鋳物師小泉さんの熔鑄実験映像(ミュージアムの田中さんが撮影)を参考に、反省会をしました。そこでは、改良点が多く出されました。列挙すると、燃料の木炭の質を上げること、るつぼの炉内での位置を高くすること、炉底を耐火煉瓦で覆うこと、燃料の炭を予め炉外で燃焼させてから炉に入れること、炉の高さを今の倍近くに高くすること、漏気を防ぐため風管の断面変化を少なくすること、燃焼時間を長くすること、羽口の位置を炉底にすること等々、多数の改良点が出されました。出来ることなら弥生人の知恵も拝借したいものです。

この失敗談を読んで、少し知恵を貸してやろうと思われた方は事務局にご連絡お願いします。

佐保川流域の弥生集落を歩いて

大森初美

第12回の弥生ウォークは、勉強会で初めての北和エリアに足を踏み入れました。11月24日は、天候に恵まれ、風もなく日差しも温かく感じられ、紅葉も随所に見ることができ、楽しい一日でした。近鉄平端の駅を定刻に出発し、途中戦国武将で名高い筒井順慶の墓所内の重要文化財の覆堂を見学しました。その後、付近の菅田神社の境内で、案内の井上さんから3点の見所の説明がありました。一つは、遺跡の立地している扇状地形の確認。二つ目は方形周溝墓の築造時期の推移。三つ目は、地域の集落動向でした。それらを思い出し、感想文といたします。

(1) まず、最初に行った八条遺跡と中町西遺跡です。そこは、縄文晩期と弥生前期の土器が出土する遺跡でしたが、発掘報告書では、傾斜扇状地と表現され、緩やかな扇状地の端部とのことでした。しかし、残念ながら、現在では緩やかな傾斜地であることも分からないほど道路や田畑が整備されていました。

今回訪れた遺跡は、全て扇状地形に属しているとのことで、唐古・鍵遺跡の沖積地と異なっていることに驚きました。前回訪問地の明日香村の縄文期から弥生移行期(前期)の集落と同一地形に属していることを思い出し興味がわきました。いただいた資料を確認すると、上記以外に前期の弥生土器は、今回訪問した八条北遺跡・美濃庄遺跡・南六条北ミノ遺跡・稗田若槻遺跡で出土し、それらの遺跡からは、縄文晩期の凸帯文土器も出土していました。

(2) 次に訪れたのが八条北遺跡です。弥生時代の特有の墓制の方形周溝墓が80基程も大量に検出された遺跡でした。その方形周溝墓群の一部に盆地内でも稀な弥生前期末の方形周溝墓が含まれているとのことでした。弥生文化の浸透度を墓制の変化でみると、いち早く弥生化が進んだ遺跡ということになり興味深いものでした。

そこでは、藤田先生より、盆地内の扇状地に位置する弥生期の集落遺跡から最近では縄文期の遺構・遺物がよく見つかっており、八条北遺跡もその一つと紹介がありました。さらに同遺跡の想定される集落域として南東に2km離れた平等坊・岩室遺跡を候補として挙げられました。参加者からは、少し距離がありすぎるとの意見もありましたが、今後の発掘に期待したいものです。

(3) 最後は、昼食後に訪れた治道遺跡、発志院遺跡、美濃庄遺跡、若槻・稗田遺跡です。午前中は縄文晩期～弥生前期の遺跡でしたが、これらの遺跡は、中期以降からの活動が確認できる集落でした。治道遺跡は、発掘報告書によると中期の環濠集落と評価されており、後期になると環濠が埋没し集落が廃絶した後に発志院遺跡(生産域)、美濃庄遺跡と若槻・稗田遺跡(居住域)に集落の移動が想定されているとのことでした。それぞれの遺跡は、残念ながら遺構の検出例が乏しく、土器の出土例を根拠に集落の移動を評価しているため、その推論が妥当か今後の発掘に期待したいというのが実感でした。



(4) 次の弥生ウォークは、今回の訪問地より西側の矢田丘陵と西の京丘陵に位置する富雄川流域の遺跡を訪れるとの案内がありました。それらの遺跡からは、住居址が中期以降に検出され、特に後期段階を中心として多く検出されているとのことでした。

今回と同じ緩やかな傾斜をもった扇状地形で、さらに中期以降に集落活動が活発化することによって、その関連で今回の訪問した集落を改めて考えてみたいと思いました。次回が楽しみです。

遺物紹介 (4)

一 絵画土器 (清水風遺跡)

会報編集メンバー

(1) 今回は、第1室中央模型2に展示されている、清水風遺跡第2次調査で出土した絵画土器を紹介いたします。清水風遺跡は、唐古・鍵遺跡の北端より北に400m、標高47m前後の沖積地に位置しており、唐古・鍵遺跡と同様の地形です。第2次調査は、二階堂養護学校(1次調査地点)の南に隣接するバッチャープラントの建設に伴う事前調査でした。土器は、写真1のとおり、口縁部の一部を欠いていますが胴部が

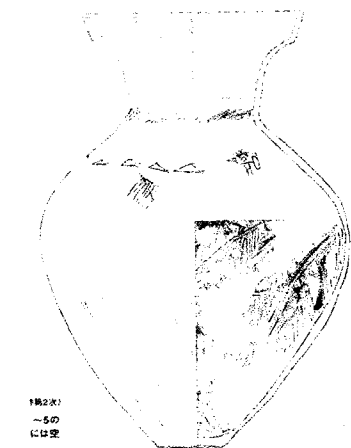


写真 1

残存しており、その上半に①矢負いの鹿②籬(やな?)と魚③④楯と戈を持つシャーマン⑤大型建物(展示説明・一部修正)が線刻されており、土器絵画の全景がわかる稀少な資料です。この絵画土器は、遺跡東側を北流する弥生中期河川跡の東岸から出土し、10mの範囲で45点の破片が発見されたとのことです。河川跡の出土ですが土器の磨耗が少ないとのことで西側に位置する集落域からの投棄と思われます。復元された土器は、胴径38cm・推定高58.5cmの短頸壺です。

(2) 絵画土器といえば、昭和4年に森本六爾氏がその著作「弥生式土器面絵画の新資料」で、唐古遺跡出土の土器絵画と銅鐸絵画とが同一文化の所産として注目していました。その後、昭和35年になって、小林行雄氏が著作「古墳の話」で銅鐸の絵を分析し、一連の絵が生き物を食う動物の代表として描かれていることを根拠に、

「弱肉強食の現実を意識して描写」していると解釈しました。それ以後、絵画土器の物語性に着目する研究が多くなされてきました。

藤田三郎先生は、1982年の著作、「弥生時代の記号文」の中で、「並列的構図をもつ絵画・記号文土器には確実に左右の描き分けがあり、右側記号Ⅰ形で人間界あるいは男性を、左側記号Ⅱ形で自然界あるいは女性を表しており、これを「二元的世界観」と考えられる」とされています。

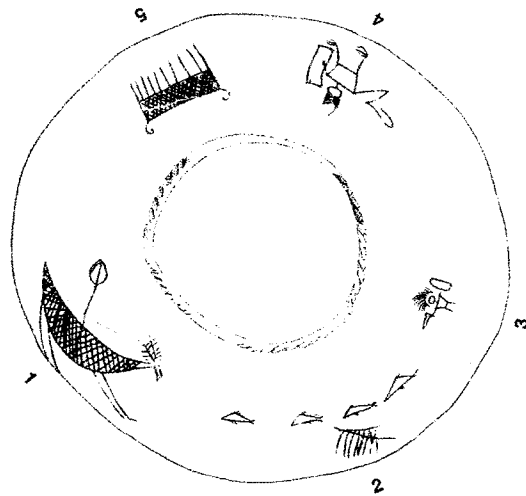


写真 2

写真2はミュージアムの図録「弥生の絵画」 「1マツリ場に供えられた絵画土器」の項に掲載されたもの(写真1も同掲載)ですが、並列的に1~5の絵画が描かれ、1~3と4・5の間には空白があり、二つの画面構成が想定されると同趣旨の説明が記載されています。

最近では、絵画土器の象徴的意味合いを探求する意見が多くみられます。今回の絵画土器については、「サカナを挟んでシカと人物が対峙する構図で、自然と人との対決がモチーフの原理とし、シカが矢を負っていることより人間の優越性を示している。」という見方です。そこには、人間と自然が対立軸を設定しない、自然との等価性・一体性を重視する縄文時代の自然観と異なった弥生文化の世界観が表されています。

第13回弥生勉強会のご案内

—田中垣内遺跡と北和の遺跡—

井上知章

1 はじめに

第13回の弥生ウォークは、引き続き北和地区を対象としています。今回は、佐保川流域関連の三本の川(地藏院川・菩提仙川・高瀬川)が形成した緩傾斜の扇状地に広がった遺跡を訪れました。訪問した遺跡の多くからは縄文時代の晩期と弥生前期の遺構・遺物が発見されていました。

今回は、それらの遺跡の西側に広がる富雄川流域の遺跡を訪れます。それらの遺跡は、丘陵の麓の緩傾斜地(比高差10~20m)にあり、弥生中期から後晩期を中心とした遺跡が多く発見されています。地形的に3つに区分して、順次その中の主要な遺跡をご紹介します。

2 西ノ京丘陵エリア

(1) 田中垣内遺跡

平成14年に大型商業施設アピタの建設に伴い田中垣内遺跡(弥生後期~古墳時代の集落遺跡)が発見されました。特筆すべき点は、調査区中央部分で弥生後期末の長径67m・幅1.7m・深さ40~60cmの溝(環濠)が検出され、水溜状遺構を介して生産域(水田)に供給していたと想定されています。さらに溝に連なる自然河道や調査地中央から20棟の竪穴住居が炉跡・井戸・排水溝とともに検出されています。弥生後期段階の集落構造がよくわかる遺跡です。

(2) 周辺遺跡

田中垣内遺跡の眼前には古屋敷遺跡があります。古屋敷遺跡は戦前から知られていた遺跡ですが、浄化センターの建設に伴う事前調査で、縄文中期から弥生前期の3本の自然流路、土坑、弥生中期の溝が、それぞれの時期の土器とともに検出されています。付近の万願寺遺跡からは、弥生後期の竪穴住居が検出されています。また、北方には、丘陵の東側斜面上に位置する六条山遺跡(標高90

~100m)が遠望でき、そこからは弥生後期の自然流路と竪穴住居跡5棟と方形の焼土坑2基が検出されています。同遺跡からは、弥生時代の盆地内では数が少ない鉄製品2点(鉄釘・袋状鉄斧)が出土しています。

また、郡山城第61次調査では、下層から多量の遺物とともに後期の竪穴住居、溝、土坑、ピットが検出されています。

3 矢田丘陵東南部エリア(富雄川⇔芦川)

(1) 西田中遺跡

矢田丘陵から東に派生する低丘陵の北端に位置する西田中遺跡の第1・2次調査では、弥生中期~後期の合計4棟の竪穴住居とそれに伴う外溝、炉跡、土坑、ピット群が検出されています。その後の調査では、同時期の16棟の竪穴住居、掘立柱建物や貯水穴、土器投棄土坑などが検出され、北和地域での代表的な集落遺跡となっています。

(2) 周辺遺跡

西田中遺跡の南方に位置する慈光院裏山遺跡からは、弥生中期の円形の竪穴住居7棟のほか方形区画溝、テラス状遺構(土器投棄)、土坑などが検出されています。また、近接する小泉遺跡では、調練場地区からは弥生中期の方形周溝墓が2基検出され、さらに大塚B地区からは、4棟の後期竪穴住居(焼失住居を含む)が検出され、円形→楕円方形といった平面プランの推移が確認されています。さらに狐塚地区からは中期の土器だまり(盆地内の土器様相と異なる土器を含む)が、その南100m地点からは中期の土器埋納遺構が検出され周辺に集落の存在する可能性が指摘されています。

六道山遺跡では、墳丘盛土内から近接する慈光院裏山遺跡と時期を同じくする中期中葉の土器を含め後期を主体とする土器、石器が出土しています。

4 矢田丘陵東南・南縁部(芦川以西)

(1) 菩提山遺跡

斑鳩町との境界に接する菩提山遺跡は、矢田丘陵東南裾部の先端に位置しており、弥生中期~後

期の竪穴住居跡(2棟・方形プラン)、ピット群、土坑を含め弥生中期から古墳期初頭の集落遺跡です。遺物は、石鏃・太形蛤刃石斧・土器・石器類が出土しています。弥生中期～古墳期初頭に至る居住域の変遷がよくわかる遺跡ですが、農具の出土がありません。

(2) 主な周辺遺跡

菩提山遺跡の南に位置する原田遺跡(従前は、法起寺南遺跡と命名されていた)からは、中期後葉の溝状遺構(布留期前葉に埋没)1条検出され、溝に囲まれた2箇所が集落域が推測されています。その西方の三井岡原遺跡からは、竪穴住居5棟と溝状遺構、ピット群、土坑が検出され、後期後半の平面プランの変遷が確認できます。また、鉄製品1点(鉄鏃)も出土しています。

昭和12年に縄文土器が出土し早くから注目されていた西里遺跡(法隆寺西500m)の下層からは中期段階の方形周溝墓や土器棺墓が検出されていますが、他の遺跡と異なるのは縄文晩期、弥生前期、中期後半の土器は出土していますが、縄文後期、弥生中期前半、後期の土器が未検出の点です。富雄川流域の低丘陵の集落の共通した集落動向は、原田遺跡辺りが西限と思われます。

遺跡紹介(5) 大中湖南遺跡

—弥生の地下の正倉院—

会報編集メンバー

(1) はじめに

今回は、1月に逝去された水野正好先生が発掘された滋賀県安土町の大中湖南遺跡を紹介します。

先生は、昨年10月26日にミュージアムの企画展「弥生遺産Ⅱ～唐古・鍵遺跡の木製品～」をご見学されました。その折、学芸員の木村麻衣子先生に「大中の湖南遺跡」について熱心にご説明されているお姿を拝見いたしました。先生の大中の湖南遺跡への想いを垣間見た気がしました。

5 結び

以上が訪問予定の主要遺跡ですが、いずれも新たに弥生中期～後期に活動を集中する低丘陵の居住域という特色を持っています。

中期以降に活発化する集落の誕生は、一般的には、経済的側面を重視し人口圧に着目してモデル化されています。次のとおりです。

前期段階の稲作の開始は、生産力の増強を背景に集落の生活を安定させ、人口の急速な増加を招来し、その人口の増大は新たな可耕地への進出となり、稲作の好条件であった低湿地の開発をもたらした。一方、前期後半以後になると、低地の開発が行き詰まりをみせ、水田化の可能な湧水のあつた低丘陵地帯に進出したとされています。

しかし、緩傾斜の扇状地帯の前回訪問地と今回訪問地の間に横たわる自然堤防帯には、水田跡のみならず弥生集落遺構はみつかりません。

従って、訪問予定地の弥生集落の誕生は、社会的条件のみの説明では困難とも思われます。自然条件も一つの理由ではないでしょうか。3月の弥生ウォークでは、その理由を改めて考えてみたいと思います。

まず、遺跡発見の経緯をご紹介します。終戦直後の昭和21年に食料不足の解消を目的として、琵琶湖周辺の最大の内湖であった大中の湖の干拓事業が計画・実施され、ようやく昭和39年6月中旬に至り湖底が現れました。その時、近隣の子供たちが南湖岸の多量の土器や石器に気づき、安土小学校を通じて滋賀県文化財保護課に連絡がされ、当時滋賀県に在籍されていた先生が発掘を担当されることとなりました。

遺跡からは、弥生中期前葉の住居域と水田域と生産用具がセットで検出され、既に当時発見されていた登呂遺跡よりも大幅に時期を遡る初期農耕集落が報告されました。遺跡は、昭和48年に国史跡の、指定がなされています。

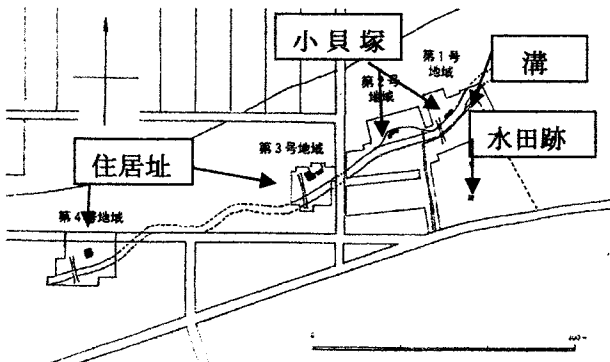
2) 検出遺構

遺跡は、西に延びる大中の湖と小中の湖、西の湖を区分した大砂州の北 90m の小砂州とその背後の湿地に広がり、幅 150m、長さ 1600m が遺跡



範囲とされています。その小砂州南縁部に 75m 程度の間隔で住居跡が東西に列状に 8 単位点在し、その住居の南側に小貝塚、その傍に東西に走る灌漑を兼ねた溝(幅 7m)があり、溝の両端には杭や板を打ち込んだ道が付き、その南には 75m の奥行きを持つ黒色有機質土が広がり中期前半の生産域(水田)が検出されました。各単位は、専有化された類似の土地利用を示し、1 単位の構成は小貝塚の規模より判断され 1、2 軒とされています。

このように整然とした土地利用が復元されていますが、ここで留意したいのは、同時期の奈良盆地の水田の形態と異なっていることです。奈良県内で最近発掘された中西遺跡、萩之本遺跡その他でみられる初期水田は、起伏の少ない緩傾斜の扇状地形を利用し田越しで給排水を行う方式であるのに対し、大中南遺跡の検出された水田跡は畦畔が想定され灌漑水路を利用した水平・平坦面であったと報告されています。



なお、灌漑水利は集落全体の共同作業の一方、その用益は小貝塚の存在より単位集団毎のものであったと想定され、奈良盆地の大規模集落内の消費・分配の形態と異なると社会関係にも言及した報告もされています。

(3) 出土遺物

遺跡は湖底遺跡ですので、保存状態が良好で生産用具、日常用具、祭祀具などが多く出土しています。尨大と表現された大量の土器は、甕・壺のみで高杯、鉢はみられないとのこと。時期は、畿内第 I 様式の土器は若干で大半は第 II 様式に属しその後半が多いとのこと。なお、小砂州の北縁には湖水が打寄せ、遺跡は湖水より 126cm ほど高い地形条件を踏まえると、畿内第 III 様式期には湖水位の上昇に伴い一時期には水没した可能性を示しています。

遺跡では、156 点の木製遺物が出土しています。出土した木製農耕具の量の多さに注目が集まっていますが、種類も豊富で、鍬や鋤等の機能に対応した木製農具の形態分化の過程が解明されています。また、数多くの未製品の出土からその製作工程が見事に復元されています。

今回は、当時、国内で初めて出土した人形木製品(木製彫像)に着目します。人形木製品は、現在では弥生期の祭祀具として各地の遺跡から出土しており縄文期の土偶とは異なった祭祀形態が想定されています。しかし、同木製品は、唐古・鍵遺跡をはじめ奈良盆地からは出土していません。先述した水田経営の形態差を踏まえると、異なったコメづくりの伝来ルートの可能性を想定します。

なお、同遺跡からは芒(のぎ)や枝稷(しこう)が残存した穂束が出土しています。その稲穂は、稔熟度が低いとのこと、初期の農耕社会の生産性が低いことが示しています。そのため、漁撈、狩猟がおこなわれたと思われ、遺跡からは漁業を裏付ける網(径 22cm)・舟(幅 60cm)・櫂・鹿角製銛が出土しており、狩猟具として多様な弓や石鏃(100本)と銅鏃(5本)も出土しています。

(4) 周辺の弥生遺跡
最後になりますが、「日本の水稲稲作の揺籃期を
如実に示す」大中湖南遺跡ですが、その周辺には

守山市服部遺跡、下之郷遺跡など弥生時代の重要な遺跡が多くあります。これからも滋賀県の弥生遺跡に注目したいと思います。

唐古・鍵考古学ミュージアムから講演会のお知らせ 3月21日(土)午後2時~3時30分

「唐古・鍵遺跡の織物にみる 弥生時代の紡織技術」

福井大学教育地域科学部 東村 純子氏

あなたはお酒が好きですか？

植田洋高

こんな質問をされたら、あなたはどうか答えるでしょうか？単純に「お酒を飲むのが好き」という人もいれば、「お酒は、飲めないけど、お酒の席や飲み会の雰囲気は好き」という人もいます。

この「お酒を飲む」と「お酒を飲めない」というのは、アルコールを分解するALDH2(*1)という酵素が体内で活発に働くかどうかで決まってしまう。日本酒やワインが体にいいと聞いて「健康のためにこれから飲んでみようかな」と思ってもお酒に弱いALDH2不活性型の人は、逆に急性アルコール中毒などで身体を害すことも考えられます。したがって、自分がアルコールに強いのか弱いのか、どの程度飲酒をできるのかを知ることは重要です。

お酒を飲む体質かどうかを判別する方法に「アルコールパッチテスト」(*2)というものがあります。詳しい方法は次のとおりですが、このテストは家庭にあるもので簡易にテストできます。

(*1) ALDH2

体内のアルコールは肝臓で分解され、その際に発生するアセトアルデヒドを酸化して分解する酵素がALDH2です。この酵素を多く持つかどうかで、お酒に強いタイプ(ALDH2活性型)、お酒は飲めるが顔が赤くなってしまうタイプ(ALDH2低活性型)、お酒をまったく飲めないタイプ(ALDH2不活性型)に分けられます。これは遺伝による生まれつきの体質であるため、お酒をまったく飲めない人がお酒に強くなるということはありません。お酒を飲んだ際の顔面紅潮や動悸、頭痛などのアセトアルデヒドによる症状をフラッシング反応といいます。

(*2) 簡易のアルコールパッチテストの方法

- ① 薬剤のついていないばんそうこうに消毒用アルコールを2, 3滴たらして湿らせ、そのまま上腕の内側に貼ります。
- ② 7分経ったらはがし、反応をみます。
- ③ さらに10分経って、もう一度反応をみます。

結果

②で赤くなった人は、お酒をまったく飲めないタイプです。③で赤くなった人は、お酒は飲めますがお酒に弱いタイプです。色が変わらなかった人は、お酒に強いタイプです。

編集委員

井上知章 植田洋高 大森初美
谷口敬子 花坂志郎 福島道昭

事務局からのお知らせ

- ・新年度になりますと、平成27年度の入会と会費納入のお願いをご送付いたします。
- ・平成27年度の定期総会は、例年のとおり4月の第3土曜日に予定しております。